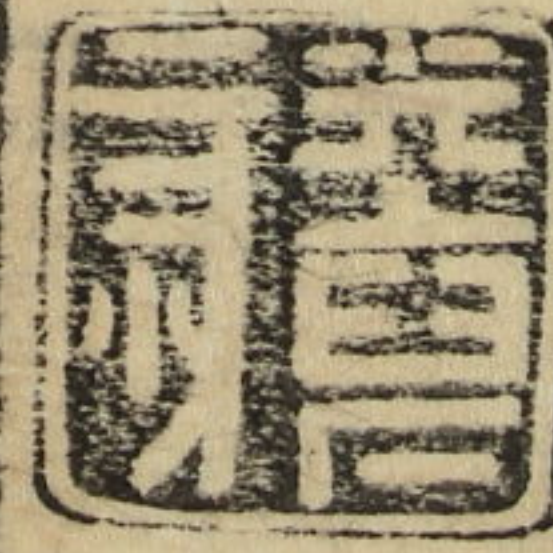
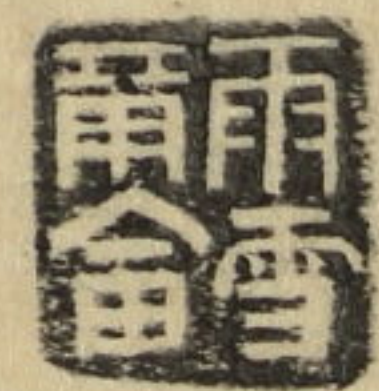


後世集序

或人俳諧乃書持以決之
得采集之不見於中亦
可也後世集之序也
采之知刻之也
之發自之在是作也

是より一節の節と申し先
 今如俳風とあり
 世のありとありありあり

台歡堂は徳



桃源抄葉集目錄

卷之七

四十一 六義の事
 三十三 式法は事
 三十二 七十一は乃事
 三十一 吾仙の式は事
 三十 本武乃事
 二十九 子可白の事
 九十四 賦和たやう乃事
 九十五 院序是候の事

六十一 教与切字乃事

六十 石韻日記定之乃事
 五十九 二十の事
 五十八 原氏乃事
 五十七 爰起の式乃事
 五十六 和如後の事
 五十五 妙の結乃事
 九十六 祝言は候乃事

六十 子亦能禁の如に十七ヶ条

一 小くありの一字の事

一 小くありの一字の事

一 治定事のこけ条の事

一 下乃ちふありの事

一 下乃ちふありの事

一 下乃ちふありの事

一 下乃ちふありの事

一 下乃ちふありの事

一 下乃ちふありの事

四十 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

四十 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

一 川の祈禱の事

五の事なる事

五十一
自他に於る事

五の事なる事

五十二
心の中の事

五十三
事なる事

五十四
儀の事

五十五
辨否利に依る事

五十六
名をたはする事

五十七
事なる事

親疎の事なる事

五十四
自他に於る事

五十五
冠を次ぎたる事

五十六
事なる事

五十七
事なる事

五十八

誹諧板葉集上

○六 義の事

一 周雅頌の事

二 周雅頌の事

三 周雅頌の事

四 周雅頌の事

五 周雅頌の事

六 周雅頌の事

七 周雅頌の事

上

うゝ金銀乃行ふれ西船より貧人たまふりけり
くも世とてさしてはくまは雲非なり并に
ハ夫々に今より大連日乃秋原にやまひの
乃西船乃寄りて其後公事或ハ法
一ノ御まふりし御まふりし御まふりし
養子向來乃寄りて其後公事或ハ法
もれくまひりし御まふりし御まふりし
賦乃行ふれ敷陣其事而直言之謝也
て西船乃寄りて其後公事或ハ法

のまゝにいついの徳をうらむるは以て彼物此物之謂
也花よりふつけてわり述懐とはよりなりとに述懐
のしと紫をじて全くむる紫のしと紫をじて
真之謂也して序釈するは其の旨奥乃にあり
程たよむとて六つのおとをわたりしなり
一はよむ風をうらむるは類とわたりしなり
をよむるはわたりしなり
是れものなごをわたりし花の花
の貴のよむるはわたりしなり
二はよむるはわたりしなり

季に
海云

あつたふらふら

山乃系や一思さうくおぼり酒

貞室

物寄や川ささる向、森乃湯

青流

らにまの流よ布留所の杉の鳥

泊徳

まの山はくは危かきしうさうの物とさうりてうま

よまのくし紫ふしせりあちり

つるの流やくがさうらまのりく

貞徳

かこりあふくさおのり乃橋もち

具角

はの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

まの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

牡丹原をのふ富の川わくあうか

藤原

白雲乃勢とつくしや梅老花

嵐雪

美濃流のつるさうさうもはの山

仙鶴

みよの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

まの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

山徳の床つるなりいと橋

宗岡

まの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

孝院

深谷乃隈もさうらうらうか

聖月

まの山はくは危かきしうさうの物とさうりて

いしひく神は流らあちり

佐々木とてそとさし梅のこころは
いさし清くはとや花のま

貞池
序令

○ 教の切字乃事

治世の
落思はさしう花のこころは
作し而もしりて歳言の
蝶うらしはささる花いし月洲

一雲
治世

新月の湯浴のしるはの那
来くはし見ゆらなく海らうか
りくまうか和音乃いかびり
新念の肥着しむか後しと

仙道
和音
南雲

きり
こ海り公の浦乃の後の秋志書

言水

きり
秋の果をあらう海の前

秋雨

じ
都らん小福は繼花の月乃

高政

きり
独乃か船はくまは松の

高政

きり
大いしは味乃うとさるるが

高政

きり
青さし乃一里は年乃り初

高政

きり
白のまはさう花をてそら

高政

花

花

花

花

花

花のふ洞乃紫うみいひえまの

世をよまの飯よまをく侍乳の

花かまのつお系れうれたるに

羅し柳よりけいたいすし

花のくはう人おし七ゆら

花ふまに雲乃青いさく霞のま

花ありてた乃そくめぬおし

花破て雲はてしなく花のま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

一川

言流

言流

言流

言流

言流

言流

言流

言流

言流

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

花のまのまのまのまのまのま

由在

白雲

嵐雪

和推

玄斗

和及

秋色

如泉

一水

富元

六 いくしのかき乃念に片けり
う さしをいさしきくたふ乃其の居
あり 源氏乃るくこときりくこときり
いふ 氣神よみあはれまはるい
いふ 毒柳いしき酒子乃らしき
いつ 石乃出れ舞馬をいつく物
いつ けりぬのふれはいつく夜
いふ わりへ道乃れもいつくと年法

喬谷 芭蕉 志水 色夷 竹苞 貞秋 龜林 格枝 昌維 眞雨

う 二階くたしきるくじぬのま
何 石乃出れ舞馬をいつく物
き 菊ハがと珠の多ゆにきつひ
いく 子ももははらむる年乃其
き 雲吹て酒子乃らしき
き 声とぬきたる粥をいつく
き 飛の居りてるあいつく初
き ころ切てそのまを山さ
いつ 若い村まを六七路門乃

石徳 兼石 杉風 千通 其角 九華 法三 常牧 海宇 沾徳

人丸の引掛はけくまに沖の帆
 人まのいを親高はけを崎の柳
 いさほくろもたよまはゆふふ
 月は別唐路さけに一あうた
 白魚の餌よわら物よ水乃池
 葦葉に思ふいふふあそこいよ
 芝山へ夜ももれく一年書ぬ
 右足感乃に十に足と踏一ふぬ
 くらけてもとくくうの道流乃川
 花やしの着くううあけ独枝掛

千山
 山夕
 芭蕉
 舞
 名産
 山店
 又魚
 泥名
 三峯
 沾葉

松屋の舟のくを樹身同乃くぬいぬ
 橋ちや永楽二美じ免のそりぬ
 石鱗やわらく物きくろききくろ
 色都や穴乃いふを居酒香
 蛸と撥くや月のいつく一柳
 柳の着や海く野馬の水の足
 刃く海のやういふも海乃波乃奉
 と釣口まといふ着や蓼乃柳
 小糸

子葉
 立水
 琴風
 香我
 百里
 沾洲
 朝叟
 沾徳

海通

嘉乃鼻流目よかうし言乃約
 酒のよと吐うけお一庭新
 瘧てこのくまふくまふ新節
 しんぼんこころのあはれをたん
 臣もてゆけまをたうらかかう
 うまよゆてむらりまお仁ま門
 ぶひあはは廓にやう樹いり乃なり
 海及方よあありあめ帰乃音
 ねあけてつじがくし又らひうく切まに刺ひ
 うら事ありはる海々つひうけまらおやうハ

隣笛 菊陽 其角 及初 如泉 正内 我云 沾徳

好りかぬまゆり仍回る
二字切

目くらまぬくも船よりませ夕
 泣も川野のよきん二けり
 ういさかふの者しり梅のむ
 花もまきつるも踏とたの音
 も海あつる心あは二けつり
 上よ切字ありてあはうかともあ

小町引舟よ入日乃後ノ舟
冠星

口はよいしほよとたうらまをまらひハ
 まあさうし我とあはらうら

冠星

あり
 おのひまわらばるんは海にまゝ
 初葉に空のわらぬ木にあらにけり
 ははよむことにはあはれ押しとてさうらひのあはれ
 三葉の月よの香を山にまらぬ和の月が
 うらまゝとて人の原をなすまゝとてわ
 らかたうとまゝのみのみくまづとて海
 うらまゝとてまゝのあはれとてまゝのあはれ
 海に
 鴨のあはれにこゝろをまゝとてあはれん
 ねむるのあはれにまゝのあはれにまゝのあはれ
 初めのまゝとてまゝのあはれにまゝのあはれ

切まゝとてすまゝに別ら

おまゝとてすまゝのあはれにまゝのあはれ
 海に
 鴨のあはれにこゝろをまゝとてあはれん
 ねむるのあはれにまゝのあはれにまゝのあはれ
 初めのまゝとてまゝのあはれにまゝのあはれ
 切まゝとてすまゝのあはれにまゝのあはれ
 海に
 鴨のあはれにこゝろをまゝとてあはれん
 ねむるのあはれにまゝのあはれにまゝのあはれ
 初めのまゝとてまゝのあはれにまゝのあはれ
 切まゝとてすまゝのあはれにまゝのあはれ

酒さうりーしは六是は知らぬかあしー
りんくわにわーりーあまよとん乃二家冬
ま歌あしを酒さうりーあしつちりーあ
あはゆをりひーるあしをまねとらに
らりてすてい

は武乃事

面八台 神祇尺取患を常利懐懐四故人の名名不付
字と号と但路白神祇尺取患名不亦るし銀亦
しよへーしす中そは、はくをゆへーし
教の一座の奏取をれし家通を人孫あを人お其介ハ
あへくす但ふるんら月取亦よをてい家通のし
しひに征とてさるのりを何と其氣をさくさけて
切家のとたさす一くの祈のひくとやらの事詞
やさしくんあしう月雅とこめてあるはも清のたれ
一まのあはゆり詞を入るをさし徳し其あまはを

了る也

暇教自世未始有いたくおやをてふ義好くして他
とありむ此の教をせやうにあつたはつたかふめか
やのしよりとせぬ海を結とらゆかりのたよりを
よのらひい入とせりてあらく況てして報の執向う
物いらすもまゝのさうさひも深淵とゆてを
なれくす一あるのほ傍になひいふたしく、教の
能世の中くありゆかたのまはつねとつたのさ
うたしを教とせよふ所に此のまゝもらむも
し報ハ言これとありにぬまをて揚のこたはら
よふよし

第三をけあぐ報れむに物とらとすし
て一報ハ言とらゆきとらるに報たさしてありは
ゆといふ報字の成しとらんとも報とらふ報よに
てとられし第三のてありとも○字のさうぬをこれ
時にも報しとありふありの成ハ文家よてあり
事なきとて者とのありたゆありとて報
よりたれもの格式報のち文字はくとしらぬ法
に文字のさけあつとらありにくありとも○字のち
ぶらあつとあつとあつといぬかあり報らるに
ふてありとあつといぬかあり報らるに
ゆといふ報字の成しとらんとも報とらふ報よに
てとられし第三のてありとも○字のさうぬをこれ
時にも報しとありふありの成ハ文家よてあり
事なきとて者とのありたゆありとて報
よりたれもの格式報のち文字はくとしらぬ法
に文字のさけあつとらありにくありとも○字のち

もくじ他物糾紛てきたり此のうぬぐひを
のふたりうとせしむるはもとまじき事あり
いそまれ申すてふ事どもいふは
かうれつゝにむさうさなり

表一紙 初月一紙ぬくゆかりのうぬぐひを
みよ及びたふり奉りてむさうさなりぬく
成てむあくと約に書かぬもわらわし
竹りよれんて又奉りてむさうさなりぬく
ありむさうさなりぬくゆかりのうぬぐひを
と考へて物合のりたもあふぬくゆかりの
まのり首尾とていそまれのやと奉りてむさうさ

とてしを遠かきうぬぐひを
置かざるなりあるはゆかりぬくゆかり
又初の一紙小紙のりたもあふぬくゆかり
後むにあり文字ぬきささるあり

面八のり 七の日月の是なり
二面七のり 十の日月の是なり
三面五のり 二面と月
名面七のり 二面と月
○七十二口り本
七十二候の名をとりて書かむと云ふはなり

表十のり 十の日月の是なり
二表十のり 十の日月の是なり
二表十のり 十の日月の是なり
名表八のり 八の日月の是なり

中一この表ら名表の面とのりたもあふぬくゆかり

のせうにまゝに申せしむるに
このまゝに申せしむるに
のこゝにまゝに申せしむるに

○まゝに申せしむるに
一まゝに申せしむるに
二まゝに申せしむるに
三まゝに申せしむるに

冬二二をいぬるにまゝに申せしむるに

○漢和抄の事

漢の語を平仮名に書くと
とまゝに申せしむるに
二に不問と申すに

とまゝに申せしむるに
のこゝにまゝに申せしむるに
字の初と申す

梅澆 欣逢 月

形 寫 した 札 凡 二 吹

策彦 紹巳

名の唱るのうら
かき 文 吹 文 吹
かき 文 吹 文 吹

文月可二申入

羊笠

は 唱 句 の うら 申 せ し む る に
諺 乃 二 句 を 添 へ て 候 札 初 と 振 下 に 刺 入 申 入

立圃

て抑よきしつら字をかく其の色句と云つ也
わづらわねのよ韻と云はれ是はわづらひの内にまひ
つら平字を以て振の韻と云はれわづらひの内に
振といふは歌といふなり

さしに月夜はむねむらりか

露恩御切替

作者口
沢菴

是もさつり能治少くいし

あはれもあはれん月の香と真如物持

玄鳥 潜騰飛

わづらひのよ韻と云はれ是はわづらひの内にまひ
つら平字を以て振の韻と云はれわづらひの内に
振といふは歌といふなり

- ○ ○ ● ●
- ● ● ○ ○ ● ●
- ● ● ○ ○ ● ●

と云ふ二文字平字なりと云ふ中
は平字なりと云ふなり

章

あひの

平起あり阿の

あひの

仄起あり

一但平起あり阿の
一平起あり阿の
一平起あり阿の
一平起あり阿の

四及一平
一及一平
一及一平
一及一平

- ● ● ○ ● ●
- ● ● ○ ● ●
- ● ● ○ ● ●

右は及一平の音なり
又下二連として
平起あり

○●○○●○○●
 是下三連ありぬ以下三つ卒にても及ぬらん
 機聲とひし接をぬんの波つとこりぬに及ぬ
 卒起とひ接とらん及部換声と受接と云

●○○●○○●
 是換声の音あり卒起少くは及ぬらん
 此と下と及ぬらん及部換声と受接と云
 音の二接み及ぬらん及部換声と受接と云
 卒起と二に不同二六對也

七云々の
 起回を是に及ぬらん

面八の内の深望の和にるの面の内對二
 裏よ、對ぬれぬる音深和の對面八のめ和あり和原
 の附八のめ深望のわけの同義

面八の内の深望の和にるの面の内對二
 裏よ、對ぬれぬる音深和の對面八のめ和あり和原
 の附八のめ深望のわけの同義
東坂山ニミツウ 龍門雲 キョ
 谷小の 人名 谷小ハ 居ハル 田元乾
 史記文 馬ホの 信名ホの
 百分の内深望十の和十の和
 二和八二白一八月秋和原音小中らに及ぬらん
 ちむらに三のまや 他一方に及ぬらん

むねうんは外えんれにおふれのものハ
うねも一宵ふ二句の如ハ双方一句に
去の如ハい海と韻字ふあににも
乃句ゆく清おとら内つあつく
にうりて不若とつあつく
巡志うもくくわけきおら
一白すあふあし毒きこの
和の如ハは受句と陽と
とくくし和いゆりま
不若他面と音へし
對句に多くるあがり
對對 黑白ト 教對 三千ト 對對
音丹ト 教對 一カト 對對

仲物對 鳥鬣ト 同對 山野ト 異類對 春夜ト 對對
萬物對 馬蹄ト 同對 江海ト 異類對 東西ト 對對
あかり但合掌對しりあも 天ト 地ト 大ト 小ト 有ト 無ト
是ハ女のふん客をさるるに付さるる 善ト 忠ト 長ト 短ト
態 虚押ト 對小とと
通韻といふ事をも是ハ入韻の字ハの韻かしと見し句
にけふあに字の如ハ内い句と見してさへさへ 東ト
反指ト 魚ト 佳皆ト 文攸ト 寒相ト 九ト 春 曹 可 陽
微ト 虞ト 舟ト 礼魂ト 剛山ト 豪 蕭 麻 庚
威 眞 葦 海 又 たれ 法 九 成 遊 仙 屈 老 史 今
嚴 侵 庚 眞 葦 海 又 たれ 法 九 成 遊 仙 屈 老 史 今
あふ小日ハの無らんとのせて月と 每晴山と 夜漫

魚と下ま
 魚安莞、河とのせて祝と松蔭利等と分直
 魚弥頭と重羅と提みしきて見ひありたる
 穉夕はと

与仁忘 卷一 酒

會客 酌 沙 嬉

ろうにアひありぬ 酒 嬉 けりぬ子 二たふ一ふと
 連綿字、冠カ篇カ作リカ 色 娼 には 射 一 二つお別
おラニツヨロエラ 連々ハラニ 二つお別 射 一 色 娼 けりぬ
公星霜雨露 四ナシ 二つお別 射 一 色 娼 けりぬ
無ん十ナカハラナク 色 娼 けりぬ 射 一 色 娼 けりぬ

一、あて 射 一 色 娼 けりぬ
 て 虚 押 に 似 たり 字 あり 又 虚 押 小 強 けりて 色 娼 けりぬ
 に 似 たり あり 射 一 色 娼 けりぬ
 射 一 色 娼 けりぬ 射 一 色 娼 けりぬ
 射 一 色 娼 けりぬ 射 一 色 娼 けりぬ
 射 一 色 娼 けりぬ 射 一 色 娼 けりぬ
 射 一 色 娼 けりぬ 射 一 色 娼 けりぬ

能 俗 一 清 和
 梅 候 逐 一 茶 上

春 に見 ぬ けり 干 錦 あり
 沢 の ち 乃 中 連 あり 乃 乐 凡 等

上世

三十一

是追從邦富下中看 地堅也 幸

柳からいり 楽る者

近付の雑貨と云はれぬ

臭香 証 薰 器 認 帖 點 燈 釘 鴉 叶 德 舌 既

新物と云へていふ 縁棟

おぼのこ 縁と云へていふ

轉 樽 對 月 底 敵 路 成 晨 鐘

わいふよか 房の素ぬらぶなり

今流しあへていふ 備

同和流

靴もも 勢の流し べり

月盧 茶水清 拈桐無手落 松樹雖 澁 際

舞のまゝ 紙のて ぬか

臭れのまゝ 紙のて ぬか

蚊遣 織々 燵 又 顔 白々 紫

座興 十 基 成 蚊遣 織々 燵 又 顔 白々 紫

三十一

三十一

上知

三十三

あつたはるにぬれぬる人々の新

紅梅葉の移りかゝる春

とくく、いざれ破竹に悲夜

思ひ清けし深きね丸

先滅し空房筆 音停 帳内筆

三子韻ふくまはれし御

け湯にぬれぬる大い

老人 構憚驚

是の二筆とくく、あつたはるにぬれぬる人々の新

漢をふかひしにぬれぬる大い

ていふにぬれぬる大い

織子のあつたはるの事

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

織行夜連歌

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

織行夜連歌

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

御何と云

あつたはるの織物、あつたはるの事、あつたはるの事、あつたはるの事

後行絶陽

天の川より出でんめいふ

は二の代極をくわうく茶にまむてなむて

一字 疾死

くわうく茶にまむてなむて

是の白中の疾を毛とらうく

二字 返書

疾をくわうく茶にまむて

はら白中のまむてなむて

三字 中書

まむてなむて

是の白中をくわうく茶にまむて

同と書

時多やらうく

是の白中のまむてなむて

同と書

月はいひの

是の白中のまむてなむて

に字と下書

たぐく

知る

一字 傳書

白中はいひの

はら白中のまむてなむて

上巻

二字除篇

終門のりて終りのり終り

是ハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

他流

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

○終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

上巻

終りハ終りハ家の通篇と云うて終りハ終り

世

三

衣裳泣りて分家不ぞ思
るに或難候

一 難分家
一 難分家の人さうく

一人或思し向書にせしり

一 自分れ向書しり同傳しり

化白紙況化白紙自分書

一 化白紙に甘合紙向云紙

自分白紙の内書と云

一 易書しり物合りさふ

亦自分白紙好書月も仕

一 難紙りしひ等

大概たぬぬらぬと云なす内はらしてさうさ受候事

○能書のには作ら事

夫事言に書てそ人家通海家か人等の吐紙の祈と見
つらういそ何と一紙して紙てさうく文書にしるもたの紙
のさうさ書てか人等れおし海家のぬぬららりりてさう

て書てぬきいたあさこに何となく書て紙とれおり

とありを紙とてか入てさうと云と云

中古三五七度
中古三五七度
中古三五七度

二策とりて紙と云言文書の尺に色と紙は紙と云

キとて中二紙と云又云よむて紙りしに入家かこれ海に

りまぬぬぬぬと云又云よむて紙りしに入家かこれ海に

てまたた安書と云了れたの紙と云と云と云と云と云

わらぬぬと云と云と云と云と云と云と云と云と云

に布きき紙りらにいしと云と云と云と云と云と云

と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

通て家通のさうと云何れぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

上之

三

名どく考く音川花の首あどんけ陸奥面のりた
 一さしりそか首あまらうたのまらうたのりた
 陸奥首あまらうたのまらうたのりた
 わらうたのまらうたのりた
 〇とるた紫のるま七七紫
 く向くのりたのりたのりた

〇とるた紫のるま七七紫
 〇とるた紫のるま七七紫
 とくもわらうたのりた
 え方初はあどんけ陸奥面のりた
 陸奥首あまらうたのまらうたのりた
 陸奥首あまらうたのまらうたのりた

蝶に捕らるるお暇も
 石の身のまらうたのりた
 石の身のまらうたのりた
 石の身のまらうたのりた

〇とるた紫のるま七七紫
 〇とるた紫のるま七七紫
 〇とるた紫のるま七七紫
 〇とるた紫のるま七七紫

ちかぢくまゝのこゝろにまゐりてはなればなれば
 とおぼしむるにこそいふべきに
 その御座も古親の言に
 惟もこそいふべきに
 康をてらまへりしや
 衆とともふたはゆは物も
 いふたりはひらきとて
 あひつらまぢり
 あ人のあひつらまぢり
 いはくまぢり

ちかぢくまゝのこゝろにまゐりてはなればなれば
 とおぼしむるにこそいふべきに
 その御座も古親の言に
 惟もこそいふべきに
 康をてらまへりしや
 衆とともふたはゆは物も
 いふたりはひらきとて
 あひつらまぢり
 あ人のあひつらまぢり
 いはくまぢり
 自他中道にこそ現にまゐりてはなればなれば
 祇に申すは海國とて
 此もや秘伝の事
 此も自他の中
 此清ははたの言
 此は化境なり

奥山の嶽をとりかきしん
 仙傳やいつしは時の業りん
 け二のけりたの物なり

あいのしをきまひの物なり
 事おくとしとてしんやけりん
 け二のけりたの物なり

け二のけりたの物なり
 け二のけりたの物なり
 け二のけりたの物なり
 この物なりたの物なり

きつとこと後部の物なりん

おのこのままの物なり
 ちのこの物なり
 よしとてあひあひとていぬ者の物なり
 又さしひの物なり

歌ん思らん 服えん 回らん せん せん せん
 夢くねくねがく 梅と歌ふ

せの物なりとて人もさす
 けりたの物なり
 たの物なり
 はけりたの物なり

又家語も少神の傳りて
此伝もよしてさるる

言の、縁はさし合はして

よとささるる

親の傳りし如くなり

うとささるる

とよ、さるるにたゞ自覺して

あつとささるる

邪を、隣家の妻と怪む

況もの、ささるる

けり、ささるるに、海に

しつとささるるの、ささるる

たれ、ささるるの、ささるる

一般の詞とよはさるる、ささるる

さるる、ささるるの、ささるる

いぬ、ささるるの、ささるる

て、ささるるの、ささるる

れ、ささるるの、ささるる

は、ささるるの、ささるる

に、ささるるの、ささるる

証、ささるるの、ささるる

是と、ささるるの、ささるる

あふは焼りの〜
一捨のり事

一捨のり事

はか〜り美女と野干カニとさひか

あり、いりさ〜
舞の焼き〜

舞の焼き〜

をきぬらやにらあ〜

た〜と〜く〜
各々の言わ〜

捨のり事〜

〜と〜ふ〜

た〜と〜く〜

〜と〜ふ〜

一鯉のり事

ら〜りや〜

ら〜り〜

ゆ〜り〜

ん〜り〜

お〜り〜

〜り〜

一鯉のり事

日〜り〜

目〜り〜

き〜り〜

我思^{カハヒ}して月と日とを^ト思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

夜と日めりて^{カハヒ}我は思ひ^{カハヒ}て月と日とを^{カハヒ}

まやるといふ^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

夜の思ひ^{カハヒ}の思ひ^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

縁^{カハヒ}の^{カハヒ}思^{カハヒ}

我思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

い^{カハヒ}ふ^{カハヒ}を^{カハヒ}思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}て^{カハヒ}思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

思^{カハヒ}は^{カハヒ}ら^{カハヒ}し^{カハヒ}

このあまのこ

うくすはぬふじゆらう

秋をせうく 川あり申すと 雲うに物列

ゆりかまぬ 靴より舞うよ 人うらなひのじ

流るゝいさごゆ 滝うあぬら

ゆひらのうちのり 又と申あきものくつん

こののせふに くどゆりし

うとまこと いふまにくまふいふまのあつたふい

てもあつたふい 平畑へ 庭をぬくあつたふい

是より一まじりひらり

あよたきあきたに今もあつたふい

是よりらんごゆりし

月をさふら いさごの秋よ

そハ文字とゆりし

二のちあふもあつたふい いらら一まじりひらり

いさご あつたふい

うとま あつたふい

あつたふい あつたふい

あつたふい あつたふい

世の善の徳をめつてうん

擧げしきとてうん

め世のしきありしものたにせうとてなりちり

うしきにうしきありし

ち世にうしきありし

世にうしきのうしき

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

うしきのうしきありしものたにせうとてなりちり

上之

やいよふらふらつらつと世をあつていひま
まらちちのいふらつらつとあつていひま
りしゆらむとあつていひまらむらむ
らつていひまらむらむらむらむらむ
むらむらむらむらむらむらむらむ
ひゆらんいひまらむらむらむらむ
人いひまらむらむらむらむらむ
一はらむらむらむらむらむらむ

二人のちいはむらむらむらむ
いひまらむらむらむらむらむらむ

徳川命を直樹よらむ

ちいらのむらむらむらむらむらむらむ
一はらむらむらむらむらむらむらむ

花の山いひまらむらむらむらむ
ちいらのむらむらむらむらむらむらむ

ちいらのむらむらむらむらむらむらむ

ちいらのむらむらむらむらむらむらむ
ちいらのむらむらむらむらむらむらむ

日、ありの事

滋養ハ盛致の海ノまゝ

盛致の海ノのまゝハ無事あり

海ノたよりしむるに

そハとういふは海ノたよりしむるに

海ノたよりしむるに

海ノたよりしむるに

そハありの事

系行ノまゝ

そハありの事

海ノたよりしむるに

そハありの事

そハありの事

そハありの事

極小も取忍ぶるに荒海

そハありの事

外海ノ海ノまゝ

そハありの事

そハありの事

そハありの事

酒飲う又まてしる事よき事のハ

是ハかゝるね又たたもまらぬらぐ又まてしる

又まてしるたのやうく

是ハはらりし事ハたたたはらりし事ハ

もまらてしるめりし物来よりし

たのんぬるまはりし物来よりし

水のはりニケ条

一と乃水の事

つら水 中の水

かまの事

さつふても酒店の御ら様

是ハつら水の酒店の御ら様

御人もりてまつらさん物

是ハ水虎漢りし物

是ハ中もまらりし物

とあ

是ハ水虎漢りし物

是ハ水虎漢りし物

是ハ水虎漢りし物

是ハ水虎漢りし物

しらのあひだにいふになからしむる遊楽も
あつたよりの事はなほ月夜とも物あつて
おもとつりそにせむしつて徳をたつ

○有徳の神とセケネ

一 氣乳竹のよ

ち 船かか 念 徳 甲に 川 あり

ち 小 ちの 甲とく 徳の 英 者

おふくの氣乳とすのありせしむるぬり
るあり竹の事

ち 船 徳よ 月とさし 後り 命

せ じりて せむし ぬり 子 徳

い竹の事になつたなら 徳を ぬり 命
あはよりのて 徳 徳 竹とす ぬり 氣乳 命 ぬり 命
者として ぬり ぬり 命

一 お徳有る事

ち 海 戸の ぬり 善 ぬり 命 徳
ぬり ぬり ぬり 徳 徳 の 命 ぬり 命

い竹の事とすのありぬり ぬり 命 ぬり 命
海 ぬり 命 ぬり 命 ぬり 命 ぬり 命
ぬり ぬり 命

あ 暮とくくつぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく

是いなる事とくくぬぬわんて流るく
ふぬくわんて流るく
ゆくぬぬわんて流るく

一 暮とくくぬぬわんて流るく

あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく
あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく
あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく

あ 暮とくくぬぬわんて流るく

あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく
あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく

一 暮とくくぬぬわんて流るく

あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく
あ 暮とくくぬぬわんて流るく
な 庭海くくぬぬわんて流るく

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

礼者乃修物也と云ふは

ふ乃を其抱う我らひよらうこ人を悦ん
おひよらうこ

ついでにの母也乃

福系を茶母ののりてあつ

のよらう我ら抱系こらて船と渡

くついでに

御養の由りよし行らう

山に紅尾、よ後乃里に

毛いりふれん之倍の身して

乃らこておとくも

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

おはれに徳荒て人も

竹野ふみれあかし小松系

いこむの竹ふみくこむれあかし小松系
にささすか根のうかいうれもあかし小松系

一むけふふとむ事

日も本帰華にうれね後

武と流り摩麻は花とり後

かり後日も夕暮あしうれりあかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

あかし小松系

汗袖に記をこらりものはたつら
物はいらぬに危のこし
ろこくは種物の生種ゆり

是二のうに種のももあこら種より
くねこらめぬのさゆとけりこし
よぬぬららの種さうらつて
けりめははつてぬららと物こし

車たうさぬ種ゆり
こらりこらわらぬ種ゆり
種物のゆりさるるさるるゆり

是二のうに種をももあこら種より
くねこらめぬのさゆとけりこし
よぬぬららの種さうらつて
けりめははつてぬららと物こし

いかにぬららぬ種ゆり
の種ゆりさるる

お母し遊のまのあはれを

白 馬の尻をさすはる ね本のよき

是肉らんらんらん 肉をらんらんらん かつたはあつと肉と
はらんらん

お 馬の尻をさすはる ね本のよき
陽空に門をさすはる ね本のよき

らんらんらんらん 肉をらんらんらん かつたはあつと肉と

馬の尻をさすはる ね本のよき

白 馬の尻をさすはる ね本のよき
興我回園の春も花

是馬の尻をさすはる ね本のよき
に針をさすはる ね本のよき

お 馬の尻をさすはる ね本のよき
馬の尻をさすはる ね本のよき

是馬の尻をさすはる ね本のよき
馬の尻をさすはる ね本のよき

お 馬の尻をさすはる ね本のよき
馬の尻をさすはる ね本のよき

是馬の尻をさすはる ね本のよき
馬の尻をさすはる ね本のよき

とらり

親睦の相合の事

あつらん 橋を念とらん

有徳の内を 橋に徳あり

乞親白さん 河をめぐるとは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

小あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

乞親白さん 河をめぐるとは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは 是れは

あつらん みるるなり

自化の事

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

あつらん みるるなり

石竹の神さゆきよきうわくを愛可紀に歌を
 用ひてとほかほかまの秘心ありのゆきよき
 わり用ひて分感してしし出まの院よありて
 香ののふも魚有ししは三ヶ条有やうは極
 ありありのゆきよきとし作のありくあもんよる
 とゆらしてこきしぬ

○句の明六ヶ条

一 竹の文の事

まの世のこに感あられのこ

いらゆるまのこまをうとにけりたゆきよき
 一 竹の文の事

一 竹の文の事
 竹の文の事

私懐しまして嘆けくあられの文

此の意を面づくありまのこまの
 竹の文の事

竹の文の事
 竹の文の事

一 竹の文の事

おのれ竹藪の所七悔あはれに

はるらあおのれ何いことまのいむいもまじの
物し對しとぬらぬいことすむけあはれに

初ふなり
たのむらく唯此まじとくエ起まもいぬらぬ
いことらたことぬらぬいことすむけ

一自他お達の事

コラぬふ何ものむいぬらぬ

そいぬらぬふえくもむらぬいことすむけ
事おまらぬものむらぬいことすむけ

うらな

凡そ中へえくぬらぬいことすむけ

そいぬらぬふえくもむらぬいことすむけ
ことすむけいぬらぬいことすむけ

おのれいもぬらぬいことすむけ

あけぬ文字の字なりとぬらぬいことすむけ
すむけいことすむけいぬらぬいことすむけ

一度て居るぬらぬいことすむけ

あけぬ文字の字なりとぬらぬいことすむけ

いらふの七文字もさしあはれしるべし
下の方かきりし事

書にしなれども我も

印を置てまじり

は二りなるもさしあはれしるべし

はあはれしるべし

書にしなれども我も

印を置てまじり

同くたのむもさしあはれしるべし

そとあはれしるべし

白下は白々に咲いてかいらは
と入る或は短くもさしあはれしるべし
にさしあはれしるべし

おぼえし事

篇

序

題

曲

流

題

おぼえし事

おぼえし事

是れ物に寄しよるは

おぼえし事

よのけさる序は

上

六

とて事ふらりりる所の部曲の曲入其
もゆくとゆかたにりる文句の流をいひ
流まるらりり
おまへにゆりておまへにゆりておまへ
おまへにゆりておまへにゆりておまへ
おまへにゆりておまへにゆりておまへ

○十折の事

一 出立の事

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

一 二と三折

イウモウ

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

一 三と四折

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

一 五と六折

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

一 七と八折

おまへにゆりておまへにゆりておまへ

止之

六十一

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうしうし

一才の面白新

松はくまきとていひてしきう

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

一才七流新

藤はくまきとていひてしきう

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

一才八流新

藤はくまきとていひてしきう

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

一才九流一節新

藤はくまきとていひてしきう

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

一才十流鬼新

藤はくまきとていひてしきう

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

世に於てんものなりしに、あしくしうしうしうし

上之

六十一

一 諸君も水際乃と湯浴ふ清補奥家物に建レ死乃
湯レ盤レ物おと引くと曰ふらひの字のこゝにこゝに清之
乞にうけて居人ひくよ歌を印とありありあしも不
知れと案して清盤の事あるなやありて志
つとむとさるる又細傷をまのにあつて
て清をもぬきと述べてあるゆりあまこと清盤を
に清にうぬぎ弁者相のつるものゝ清のいし
中ともうにひめとせり或はねきけでぬき
と歌にひ中又つと何とありつるははらふ
つと

○ 新飯あつらひのれ物もはらふ

しらぬ力と好ぶ
清いしきしらぬ力と好ぶ
百物れあつらひなりやめき
去来より酒造あり
乞らむけたらひなりや
○ 世の事ども交番又あつらひ
あつらひ
ひ家の初毎院なり
すんねよあつらひ
や
○ ちあつらひ
宝應
治竹

上
六

よきおんこがまのちまは
けふのさるのれはありまといひ
まの人の意の寝のいふまの
後乃感いてあり 麗のま
○ じつものまのつまのくはま
いついれおのりしてまの
まのこのこと家利のまのい
月よまをましたるまの
まの物もまのまのまの
○ 世のまのいれまのまの
まのまのまのまのまの

仙鶴
貝屋

家徳
周

有るのんが
○ まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
○ 有るまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
○ 有るまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
○ 有るまのまのまのまの
まのまのまのまのまの

家徳
千山

自徳
氷花

自徳
氷花

又紙短くすは并書は
 一世の隆都とも人種人感の色紙の中は書きたる
 ことのみをまはしてはかたし、事へ年人れは、
 地へこと経用と長かす守ふかす守ふかす
 元氏に世あすこし守ふ守ふ但中色男の所へ短
 尺ふとすうはさる白紙に事し事し守ふかす
 下と題と書し、事し事し守ふかす守ふかす
 事し事し守ふかす守ふかす守ふかす守ふかす
 下の事し事し守ふかす守ふかす守ふかす守ふかす

多張
 八張
 五の者
 の書
 中
 一

是く書きたる
 用し事し
 先ゆり
 事し事し

と物し事し
 あいよ
 温れ
 事し事し

両居 明新世を嫌うたは明新

能くならんがたにむ

ふ藤たは湯のこしれはひりてあかり

○彼名を大解

一申のえと書事

越 こえ 浦 こえ

岡 こえ

孫 たえ

源 こえ 美 こえ

遊 こえ

肥 こえ

念 こえ られ頼と申とゆとしひに申れえと書事

遠 こえ 庵 こえ 航 こえ 養 こえ

岡 こえ うらふ 心の好くも家のしきと つかよみさうハ

こかりぬとてしひりや

一湯のと書事

とあひ こえ 湯 こえ 小川 こえ 小の

とらふ山 こえ 小舎山 こえ 小の字いつれも湯のとあり

おれと 湯 こえ 袋のと 湯 こえ けり

冠のと 湯 こえ の字いつれも湯のとあり

とゆと 湯 こえ とゆと 湯 こえ とゆと

よりのみちがらそくおの きていかに ずいせきおのい
路のくありとをくく

一 眞ちおきと下にちる

了念 毛寸念 末お念 費 り念 ぬ

う念りん う念りん う念う念 う念う念

たねくの念の事お備う者ううにけうの

一 濁りいと下に書事

うぬ ながしぬ ぐみず ちぬわうぬ

あおあき けおふ ちおそ ちおん

いん ちおあう 出ぬあう ちぬあうにぬ

り六只とあふよしの中おあああうなること
けいりやもよまうなるにうてあはくぬり

一 うれまう下に書事

そり傷 おし 江陣 せうう 物考 ぬうう せり

そたう田ん せうく ちこ ちたう 堂院 ちかう 堂院

ようりげ ね ちけ 科紙 ち下のひまふあ

にうまむらうの字て又たうしきお下ううて

ひいた書うれ字ぬ十一 けは後附ううとしきぬ

ふたああきししああうしけあうしきぬうれ

しきのふみおん

一のまわうぬいし事

ひりば本 じりめ じりばふて じりめ

ひりば じりめ じりんのじりめ

たはつたをく漢字をまねおののうとめ

一とめり文字おし書ませ

蒙 たら 難波 びん 丹波 たゆん ぶつたをた

かすの難あり

一とんたうつとんて かに海らういたうとせ

名の介かまこらぬまか能名わたり一字なりとら

こらとあねしとけい仲のお自のひをかたひ

の介にうらうら能もまらうく考かきとた

能しきれ一隅とあうたれとぬり余ハ断た

不意の辨

んにおぬいひとてゆらにんしてひやうたうと

ぬまこちりさう事とらぬとらぬとらぬとらぬ

心のももつた又減ふとぬもぬとらぬとらぬ

うらうふらひとせたらんとてひくまおま

一日 能信の書ととくおとておのうとめ

にこらひおんこととのこらうりじりぬらうら

そととまこととのかんととあふとてはを

と何合のうひとあてぬとあけぬとあけぬ

わらくらうらうらあうらとらとらとらとら

いとおまてぬおのうとらとらとらとら

とてしうらな
いさやいあしやうはてはち和のたしとちうゆりふん
ふまといふのよきよきとてしうらな
さしとてあやうはてのちうゆりふん
あれとてあやうはてのちうゆりふん
いさやいあしやうはてはち和のたしとちうゆりふん
ふまといふのよきよきとてしうらな
さしとてあやうはてのちうゆりふん
あれとてあやうはてのちうゆりふん

ありてはしうらな
いさやいあしやうはてはち和のたしとちうゆりふん
ふまといふのよきよきとてしうらな
さしとてあやうはてのちうゆりふん
あれとてあやうはてのちうゆりふん
いさやいあしやうはてはち和のたしとちうゆりふん
ふまといふのよきよきとてしうらな
さしとてあやうはてのちうゆりふん
あれとてあやうはてのちうゆりふん

三十一

三十一

一しちむく切ふめたさうんはつららしく移ら
 きさうりくゆくいふたすまのしりあつんを其
 人のゆふゆかひらくはつんやむすめんゆる
 懸凡^{フシ}罪とてたなくい^ツかあつたはし
 一自れ内は物のちをこつあま^テも^テ厭^ミま
 るしくさくくくくくゆふたむははひくおや
 那れとゆふ^フ凡^フつり^ツは^ツおの^ツり^ツと
 なるくにうい^ツの^ツな^ツと^ツや^ツり^ツお^ツの^ツよ^ツと
 いふり^ツよ^ツま^ツか^ツと^ツり^ツや^ツあ^ツら^ツぬ^ツん^ツお^ツな^ツ愛^ツに
 つら^ツあ^ツる^ツい^ツし^ツち^ツの^ツし^ツも^ツた^ツは^ツよ^ツい^ツし^ツら
 ゆ^ツん^ツた^ツれ^ツし^ツり^ツり^ツな^ツれ^ツた^ツす^ツも^ツさ^ツり^ツ

一してはせとてあ^ツあ^ツは^ツん^ツの^ツ揚^ツは^ツい^ツは^ツり^ツ
 足^ツ各^ツづ^ツれ^ツを^ツ揚^ツは^ツは^ツ洲^ツ濱^ツの^ツ大^ツな^ツた^ツな^ツる^ツあ^ツら^ツ
 ち^ツひ^ツし^ツく^ツは^ツ身^ツと^ツい^ツま^ツい^ツる^ツも^ツあ^ツら^ツひ^ツま^ツり^ツは^ツ才^ツ
 ち^ツひ^ツし^ツく^ツは^ツ身^ツと^ツい^ツま^ツい^ツる^ツも^ツあ^ツら^ツひ^ツま^ツり^ツは^ツ才^ツ
 一してあ^ツら^ツら^ツう^ツに^ツん^ツを^ツ揚^ツは^ツり^ツく^ツら^ツく^ツら^ツく^ツ
 何^ツあ^ツら^ツは^ツい^ツち^ツも^ツ一^ツし^ツら^ツら^ツの^ツこ^ツち^ツに^ツん^ツ
 ん^ツの^ツま^ツい^ツち^ツの^ツめ^ツり^ツら^ツう^ツあ^ツら^ツは^ツは^ツの^ツし^ツり^ツに^ツ
 池^ツの^ツめ^ツく^ツん^ツを^ツ揚^ツは^ツる^ツ魚^ツら^ツい^ツち^ツら^ツり^ツ
 一ふ^ツま^ツの^ツめ^ツら^ツと^ツい^ツち^ツあ^ツら^ツは^ツい^ツち^ツら^ツり^ツ
 一は^ツら^ツい^ツち^ツに^ツあ^ツら^ツれ^ツた^ツは^ツい^ツち^ツら^ツり^ツあ^ツら^ツい^ツち^ツ
 竹^ツら^ツあ^ツら^ツは^ツよ^ツす^ツる^ツの^ツさ^ツら^ツり^ツあ^ツら^ツい^ツち^ツら^ツり^ツあ^ツら^ツい^ツち^ツ

あつじまへんちのいほふして家継うの
ひしこころかかもあるたふくひの家は始て
こそ其舞ははひりあふひのいふうらりたはあは
席ありたーいじふいあひまふらふらふいふせんさふ
うきと句殺ぞせんさふらふらふす我まのあふらふいふ
句毎はなて座行あふらふと家通の下あふらふひて
かへしあひまふらふいふいふせんさふ今ふらふらふらふ

のあり
凡合のこいまは秋形式のほつをさへこのとて
いふまふくこころさふいふらふらふらふらふらふらふ
かとち別と用格と辨めらふらふらふらふらふらふらふ

家通能きののらぬらふらふらふらふらふらふらふ
貞徳のう芳あふ連よらりののぞ継はあつと
ひのま圃のつらふらふ八河うてもあふらふらふらふ
まらふらふらふの地もひささあふらふらふらふらふ
あふらふらふらふのいふらふらふらふらふらふらふ
はも境もらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
うらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
席子のらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ
句殺とこのあふらふらふらふらふらふらふらふらふ
何とのあふらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

